

ふすま絵

堂にある襖と呼ばれる、スライド式の引き戸の多くには、15 世紀の東山文化を象徴する絵画が施されていますが、これらの絵は 18 世紀の著名な二人の画家、与謝蕪村(1716~1784 年)と池大雅(1723~1776 年)による作品です。シンプルな墨により描かれた自然の描写は、東山文化が敬愛した古典的な中国の題材を反映しています。どちらの画家も古典的な中国の詩や、絵画を自身の画風に引用する「南画」を描いており、作品から見て取れるそれらの背景的要素は彼らの作品により一層深い意味を持たせています。

与謝蕪村(1716~1784 年)は俳諧、そして絵の大家として知られていました。彼は現在の大阪に生まれ、俳諧を学びました。修行の一環として、俳聖松尾芭蕉(1644~1694 年)の足跡を辿り、東北地方を旅しました。京都に居を構えてからも俳諧を書き続け、また絵を描き始めました。本堂には蕪村により描かれた襖絵を有する部屋が二つあり、その画風は全く異なります。飲中八仙図は、唐(618~907 年)の詩に基づいた喜劇的な場面が描かれており、宴から家に帰る賢人達が弟子達に助けられたり、時には運ばれたりする様子が、流麗で軽やかに描写されています。これとは対照的に、「棕櫚に呱呱鳥図」は、リズムカルかつダイナミックな画風をしており、鳥の群れや、岩から飛び立ち木々を飛ぶ鳥の様子が描かれており、襖がまるでアニメーションのコマ割りのようになっています。

京都に生まれ、14 歳にしてプロの画家・書家であった池大雅(1723~1776 年)は、幼少期に万福寺で書を学びました。彼は扇絵を描く商売をしていましたが、やがて地元の有識者に見出され中国の伝統に従って絵を描くことを教わりました。彼の作品には中国の古典文化や絵画への敬意が払われつつも、写実的な地形など革命的で近代的とされる技法が多用されました。彼が本堂で描いた襖絵は「琴棋書画図」と呼ばれており、書や画、琴や囲碁といった中国の上流階級の 4 つの才芸を描いています。